内観ニュース
第31号
発行所
日本内観学会
〒702-8508
岡山市浦安本町100-2
慈圭病院

竹元降洋、三木善彦両先生に対する『日本内観学会賞』授与式にあたって

第30回日本内観学会（吉本博昭大会長、於富山）総会開催にひき続き、竹元降洋前日本内観学会長、及び三木善彦前同副会長のご両人に対し、長年の当会におけるその御功績を讃え、学会賞を贈呈させていただきました。当日は、ご両人ともご夫婦同伴で壇上に臨んでいただきましたが、改めてこれまでのその足跡が、走馬灯の如く蘇り、誠に感無量のものがございました。この機会に、両先生が当会創始の立役者として、文字通りの二人三脚で貢献していただいたことに、まずは改めて謝意を申し述べたいと思います。伺うところによりますと、竹元先生が、吉本伊信師のもとで集中内観に取り組んでおられた最終日、師が突然、脳卒中で倒れられるという晴天の霹靂ともいえる事態が、当会設立の契機となったようです。

このエピソードを機に、"内観を吉本師の名人芸にまかせておいてはいけない。誰でも面接できて、その有効性を客観的、科学的に解明しなければ、内観の存亡にかかわる"という危機感が、先生の脳裏をよぎったとのことでした。そこでさっそく、三木先生達に呼びかけられ、学会長に、心理学者の故村瀬孝雄教授（当時立教大学、後に東京大学）をお迎えする形で、具体化の運びになった旨、うかがっております。吉本師自身は、当初、組織を作り、研究し、理論化することに消極的で、"理屈をこねている暇があれば、内観なさったら"と、冗談めいて述べておられたようです。

しかし、一旦設立されるや、陰ながら有形、無形のご支援を惜しまれなかったことも、有り難く心強い限りでした。

第1回大会（1978）は、三木先生を世話人とし、京都の伏見（御香宮）で開催されましたが、他学会にないなごやかな雰囲気と熱気に包まれ、とりわけ内観体験者のリアルな報告には、今なお昨日の如く感動が蘇ってまいります。この体験発表という形式は、その後今日に至るまで継承されておりますが、当会ならではの独自性であるとともに、組織自体の貴重な活力源になっているといっても、過言ではありません。

第5回大会の開催地は、鹿児島でしたので、その際、指宿竹元病院を見学させていただきました。大会長としてのご準備もあるなか、快く迎えていただき、院内紹介を受けながら、病院への内観導入の経緯やその実情を、丁寧に御説明してくださいました。当時、内観をアルコール症治療システムの中核として位置付けられ、院内スタッフへの浸透努力、更には地域断酒会活動への取り組みや、将来の夢等もお伺いし、大変刺激的で勉強になりました。先生の取り組みは、とりわけ医療界への内観導入に対する、先駆的モデルの提示であったともいえましょう。更に最近では、細分化され、かつ様々な西欧由来の心理療法が活用されるという医療状況下、その意味や効用を充分踏まえられつつも、内観ならではの"全人医療"的視点を強調されてこられましたが、この消息は、まさに次世代内観療法の方向性に向けての貴重な発信と、受け止めさせていただいております。

一方、三木先生は、とりわけ教育、心理分野にあって常に指導的立場におられながら、その基本を内観におかれての、出版、講演活動を通じ、内観普及という点でも、計り知れない御尽力をされてこられました。

また、その天性ともいえる穏やかな御性分は、関西弁特有の響きともあいまって、とかく緊張をはらみがちな会合等にあっても、居られるだけでその雰囲気をほぐしていただける貴重な存在でもあったことは、周知の通りです。村瀬初代会長ご逝去後は、それぞれ学会長、副学会長というお立場で、引き続き実質的なお役目を担われましたが、とりわけ三木先生には事務局長という実務まで、併任していただきました。と同時に、時代的変遷に伴い、組織としての当学会活動も、さまざまに新たな課題への対応が求められてきているのも、又実情です。それぞれに、病院長、大学教授という重責を担われながらの、当会役職併任は、年毎に人知れぬ御負荷が増していたことかと、改めてお察しいたしております。

両先生の志しと御尽力の火を絶やすことのないよう、時代意識を踏まえつつ、次世代に継承してゆく営みこそ我々の努め、と受け止め、心新たに臨ませていただくつもりです。

今後は、ひとまず役職を離れられますが、それぞれ、学会顧問として、大所高所から末長く見守り、ご指導、ご助言を賜りますことを念じつつ、ご挨拶にかえさせていただきます。

（日本内観学会理事長　巽　信夫）

日本内観学会賞を受賞して

指宿竹元病院長　竹元　隆洋

このたびは、伝統ある日本内観学会より栄誉ある「日本内観学会賞」を授与され心から喜び感謝申し上げる次第です。このような賞をいただけたのも多くの方々のご協力とご支援があってこその賜物でございます。ありがとうございました。

ところで、振り返ってみますと、昭和五〇年（一九七五）十月にはじめての内観を吉本伊信先生のもとで体験させてもらいました。翌年八月に二回目の集中内観をして終了日に吉本伊信先生が突然に病に倒れ、私が診察する事になりました。

その時、吉本先生はどうなるのか、内観は一体どうなるのかと心配して、日本内観学会の創設を提案したのでした。昭和五三年（一九七八）六月に第一回内観学会が開催され、その翌年に本学会は正式に発足して、会長に故村瀬孝雄先生、副会長に三木善彦先生と私の二人が選出され、事務局長は楠正三先生でした。その後、昭和六三年（一九八八）第一回大会の総会で私は副会長から事務局長を務めることになりました。平成四年（一九九二）第一五回大会総会では事務局長から再び副会長を務めることになりました。ところが会長の村瀬孝雄先生のご逝去により平成九年（一九九七）第二〇回大会総会で、はからずも私が会長に選任されました。それから八年余りは一応順調でしたが、平成一七年（二〇〇〇）夏に体調を崩したために、当時の常任理事の先生方には多大のご迷惑をおかけしました。そして平成一八年（二〇〇六）第二九回大会総会で私は会長を辞して顧問に推薦されました。この時、三木善彦先生も副会長を辞任され顧問に推薦されました。とても不思議な因縁であったと考えています。この三〇年間の日本内観学会の歴史の中で、第一回大会の発表論文集の発行費用は吉本伊信先生が快く寄付してくださいました。さらに昭和五五年（一九八〇）までは学会運営に寄付をいただいていました。昭和六一年（一九八六）第九回大会までは学会事務局が発表論文集も発行していましたから楠正三先生には大変なご苦労をいただいていました。こうして徐々に本学会も成長して各委員会が活動を開始し、「内観ニュース」の発行や「内観ワークショップ」の開催と「内観研究」の発行は画期的な新しい歴史を生み出しました。一方では、本学会を母体として派生した「内観研修所協会」は「自己発見の会」を生み「やすら樹」を生む力となって一〇〇号を越えました。一方、本学会から派生した「国際内観会議」は世界九カ国の参加のもと三年に一回の会議（研修会）を日本と主に欧州を中心に活動しています。本当にあっという間に多くの人々のご支援ご協力で大きな歴史が積み重ねられたことを喜んでおります。私は第一回大会の「閉会の辞」の一節で「まだ吉本先生が、こうして元気で活躍なされる間はともかくとして、あと十年、十五年、二十年という先々、内観療法というものが生き延びていけるだろうかという不安を抱きました。そこで出来るだけ早いうちにこのような会を作って、誰にでも出来る内観療法に作りあげておく必要があるのではなかろうかと感じました・・・。」と述べました。それから早三〇年、今や内観は見事に花開いて、本学会も年々充実発展の方向に進んでいるように思います。

私自身の内観研究と普及の活動は微々たるものですが、アルコール依存症の治療として内観療法が定着し、市民権を得られるようになったことは望外の喜びです。特に看護学校の教科書にさえ掲載されるようになった時は胸がしびれるような思いがありました。私の内観研究はこの三〇年間、アルコール依存症をはじめとする嗜癖行動に対する内観療法の理論と効果の研究でした。毎年二、三の学会発表を続け、毎年のように二、三の論文を発表してきました。こうして振り返ってみますと、精一杯に内観療法とアルコール依存症の二本立てに明け暮れる日々を過ごすことができたのは幸せなことであったと思います。これで終わったわけではありません。さらに精一杯に新しい一歩一歩を踏み出そうと思っています。この三〇年を踏み石として本学会がますます発展し、皆様がますますご健勝であられることを祈念いたします。

【日本内観学会賞を受賞して】
我が人生と内観

帝塚山大学教授　三木　善彦

◆思いがけなくも

竹元隆洋先生とともに思いがけなくも私も日本内観学会賞を受賞しました。とても光栄です。賞状には、次のように記されていました。

日本内観学会賞

三木善彦殿

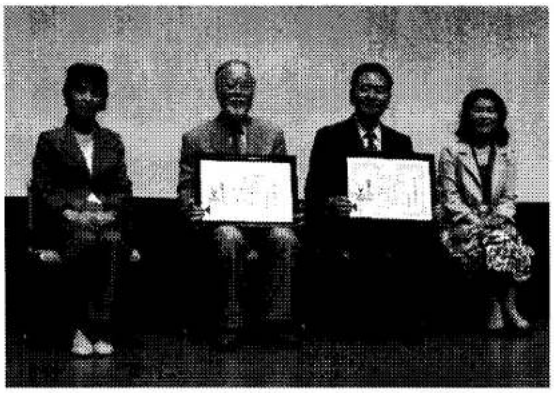
あなたは永年にわたり内観に関する研究を重ね多くのすぐれた業績を残されました。さらに日本内観学会の創設にご尽力され役員として本学会の発展に寄与された功績はまことに顕著であります

よってここに日本内観学会賞を贈りその業績と功績をたたえるものであります

平成十九年六月九日

日本内観学会

理事長　巽　信夫



向かって左が三木御夫妻、右が竹元御夫妻

この文言からいろいろな場面が走馬灯のように浮かび上がってきます。

私と内観との出会いは大学院修士課程二年（一九六六年）の春です。内観の録音テープを指導教授からいただいて面白そうだと軽い気持ちで集中内観に参加したのですが、たった一晩だけで音を上げて、翌朝にはそっと逃げ出してしまいました。それでも追いかけるように送られてきた体験者の録音テープを聴くと、魂の奥底から発したような言葉に感動し、吉本先生に頼み込んで調査研究をさせていただきました。

そして修士論文を作成後、精神科医であり、精神分析療法や催眠療法にも詳しく、さらに内観療法も実践なさっていた石田六郎先生のもとで、内観を体験し、深い感銘を得ました。そして、もっと深く研究したいと博士課程に進学しました。修了後は大学教員となり、心理臨床実践をしながら、吉本先生の研修所で内観の調査研究をさせていただきました。その成果の一つが、『内観療法入門』（創元社、一九七六）ですが、その後の研究をまとめて『内観療法の世界』という本を書こうと思いつつも、あれこれと仕事に紛れて今日にいたっており、汗顔の至りです。

一九八三年に吉本先生の援助を得て、妻と共に奈良内観研修所を開設して、内観研修のお世話をさせていただき、日本各地から来られたさまざまな職業や年代の人々と心の旅を共にできたのは、私の人生の宝です。

内観学会に関しては竹元先生が言及なさると思いますが、「内観の理論的研究と普及のために学会を」という竹元先生の呼びかけに応じ、多くの方々の賛同を得て、一九七八年に京都で第一回内観学会を開催し、今年で設立三十周年となったのはまことに喜ばしいことです。私は副会長や事務局長の役割をいたしましたが、どれほど学会に寄与したかと思うと内心忸怩たるものがありますが、今回の大会を契機に新しい執行部が新しい意気込みで取り組んでくださっている姿を見て、とてもうれしく思っています。内観の魅力と吉本先生ご夫妻の魅力が私を引きつけ、内観研修や日本内観学会や国際内観会議を通じて知り合った国内外の人々との触れ合いが、私の人生を豊かにしてくれたと内観に感謝しています。

なお、副賞として金一封をいただきました。学会に寄付しようかと思いましたが、学会の懇親会で披露していました手品が種切れになっていましたので、考え直しました。副賞を手品に投資して、皆さま方に新しいマジックショーを楽しんでいただこうと、最近はマジックショップを渡り歩いています。来年の学会ではどのようなものが登場するか、ご期待ください。

【学会印象記】

第三〇回日本内観学会に参加して

臨床心理士　仁田　公子

本学会には、第十六回の仙台大会からしばしば参加しているが、この学会には、いつも穏やかで親しみやすく温かい独特の空気が流れているのを感じている。参加者同士の間で、「互いに根底でしっかりとつながっている」という他者への信頼感が、肌で感じられ、安心して自分の内面を見つめられる場になっている。

私は、このような学会や、フォーラムなどで内観の体験談を伺ったことがきっかけとなり、心理臨床の仕事を始めてすぐに、自分の内側の整理をして臨床への構えを作りたいと思い、集中内観に参加した。以後、学会その他が主催する内観研修会との関わりを通じて、内観する機会に恵まれてきた。今は、仕事と家族の世話の両立で時間に追われながら、果てしなく暗い海の底にどっぷりと漬かり、海の上から差すかすかな光だけは見失うことなく、海底にしっかり根を下ろそうとしている心境である。今回の学会では、地に足を踏ん張り、今の自分の仕事や生活にいかに「内観」を溶け込ませるかを考えつつ、参加させていただいた。

倫理シンポジウムでは、「面接者の条件」というテーマで面接者としてのあり方が話し合われた。4人のシンポジストの先生方からは「常識」「柔軟性」「心身の健康」「広い視野」、「内観者に対する信頼と尊重、特にその人自身への成長への信頼」、「支持的に共にいる態度」「慢心への戒め」「無我」などが語られた。中でも長島正博先生が吉本伊信先生の「遺戒」として紹介してくださった「慢心への戒め」には、稲妻のような衝撃を受けた。私の心の中では、海底に差し込む光の筋は、天と繋がる光の柱そのものに変化したように感じられ、次のステップへの道が開かれたことを直観した。面接者は、プロセスを信じて、内観する方を後ろからそっと支えることが大切だと思った。

また、今回の総合テーマ「時代が求める内観」についてのシンポジウムでは、3名の先生方がそれぞれの立場から今の日本社会における内観の意義について語られた。中でも本山陽一先生の内観は、時代の欠落を補う「心の貯金」であり、「共生の精神」「ゆったりとした時間と独自の人生観」「プロセスそのものを楽しむこと」「与えられた環境に感謝し欲望に振り回されない生き方」により、メンタルヘルスの向上に役立つものである、とのお話に深く共感を覚えた。

症例の発表や、さまざまな内観の応用に関する実践の発表については、それぞれの現場での熱心な取り組みの様子を伺い、よいお手本を示してくださったことに感謝したい。

「内観」はプロセスそのものであり、個人の肉体的な死をも超越し、世界（あるいは宇宙）の終末に至っても、ゴールには達しないものである。しかし、集中内観をすることで、吉本伊信先生にはお会いすることのできなかった者も、自分の中に眠っていた「内観遺伝子」とでも呼べるような、脳の新たな働きを促す遺伝子にスイッチが入り、活性化されて、次世代へとバトンが繋げられるはずである。

今、すでに内観を知り、実践している私どもの役割は、人々の中に眠る「内観遺伝子」にスイッチを入れ、その人なりのペースでプロセスが進むのを見守ることではないだろうか・・・。表面的な「型」へのこだわりも、そのプロセスにとっては妨げとなることを危惧している。個々の「あるがまま」を尊重することが最も大切だと考えている。

初めての集中内観の直後、人間以外の生命や、「風」のような自然現象と心でコミュニケーションがとれた感動を自分の身体が記憶している。この身体の記憶は、一度泳ぎを覚えたら忘れないように、その後も内観をした瞬間に蘇ってくる。これは内観をしなければ、生涯気づくことがなかったかもしれない身体感覚である。人類発生以前の太古から受け継がれてきた古い遺伝子が内観によって目覚めたのかもしれない。

村瀬孝雄先生、竹元隆洋先生、巽信夫先生・・と、本学会の会長から会長へと受け継がれている「清々しさ」、「古神道」のスピリットに通じる何かを、この身体感覚の中に感じつつ、これからも希望の光を見失うことなく、心理臨床の仕事を通じて「内観」の種撒きをしていきたいと思っている。

【第十八回　内観療法ワークショップ（富山）印象記】

心の宝探しのスコップ

立命館大学大学院応用人間科学研究科　橋本　俊之

平成十八年十一月十一日、富山駅から紅葉が色付き始めた富山城趾公園を横切りながら、ワークショップ会場である富山国際会議場が見えた。天は生憎、どす黒い表情で、今にも泣き出しそうな顔をしている。吐く息が少々冷たい。もうすぐ冬なのだろうと、予定していた富山城の見学を断念して、少々早く、真新しい、ガラス張りの建物に入った。

会場に入ってから、事務局である北陸内観研修所の長島正博先生にご挨拶しようと思った。先日、日本内観学会に入会したこともあるし、来年度の奈良県でのワークショップのスタッフになっていたため、勉強したいということもある。ただ、よく考えてみると長島先生のお顔を存じていないことに気づいた。「あの、長島正博先生は」と伺った女性が、奥様である長島美稚子先生であることは不思議であった。奥様と一緒に長島先生を探したが、一向に見つからない。諦めて会場に入ろうとしたところ、丸坊主の頭に、黒いスーツを着た男性が慌しく動き回っているのが気になった。名札を見ると「長島正博」と書かれてある。初めてお会いした長島先生は、軽量級の柔道選手のように、技が多彩で、フットワークが軽い印象だった。

会場は百五十名ほどが十分に収容できる大広間で、前方に縦長の机が二十ほど、後方には椅子がおよそ百客並んでいる。参加者は百名を超えており、恐らく百二十名ほどであるように思われた。実行委員長である吉本博昭先生の開会の辞により「生きるちからと癒されるこころ」と題したワークショップが始まった。

最初に、内観とは何か、どのように内観をするのかを紹介するため、青山学院大学の石井光先生による基調講演「幸せの宝探し（内観のすすめ）」が行われた。内観の三項目の意味についての解説があり、「自分を見つめる事は、事実を見つめることです」という言葉が続いていく。十分間、内観の体験があった。「目を瞑って、小学校低学年のときにお母さんにしてもらったことはないですか」石井先生の優しい声だけが響く空間の中で内観が進んでいく。「お母さんは料理が好きでもないのにあなたのために毎日三食、食事を作ってくれました。一日三食、一ヶ月で千食、一年間で一万食、あなたのために作ってくれたのですね」聞きながら、なるほど母親は食事を作るのは当然と思っていたが、よく考えてみると、どう見ても母は料理が好きであるように思えない。好きでもない料理を、これまでの人生で二十万食以上、自分のために拵えてくれていたのである。当然だと思っていたことが、実は当然ではなく、ひどく母に負担をかけていたことであったと感じ、否が応でも、母に対して、深く考えさせられる時間が流れていた。

休憩を挟んで、分科会に別れる。分科会は五つあって、「学校現場で内観を生かす」「介護と内観」「無気力からの再出発」「暮らしの中の内観」「内観実習」であり、私は「内観実習」に参加した。「内観実習」は当初の定員よりも多く、四十名ほどの参加者が殺到したようである。内観面接者は石井光先生、長島正博先生に加えて、奈良内観研修所の三木潤子先生、米子内観研修所の木村秀子先生、なわて内観研修所の西山知洋先生という五人の先生が、それぞれ六名ほどの内観者を担当されていた。

実習の内容は、内観者が自分の母に対して、小学校低学年、高学年、中学校のときに、「お世話になったこと」「して返したこと」「ご迷惑をおかけしたこと」を、一人二十分間調べる。約十㎡のフロアに、仕切られた五つのブースが作られていて、内観者は静かに壁に向かいながら、じっと母に対する調べを進めて行く。そして、別に設けられた個室にて、面接者と一対一となり、調べたことを報告するのである。

私は三木潤子先生の内観面接を体験した。これまで二度、真栄城輝明先生の大和内観研修所において、集中内観を体験していた。真栄城先生以外の、そして男性以外の面接もほとんどはじめてであった。はじめての人に、そして、女性の面接者に報告するのは正直緊張して、最初はほとんど語れなかった。徐々に緊張がほぐれるにつれて、とても丁寧に、頷きながら聞いてくださっている三木先生の表情を伺う余裕が出てくるようになり、先生に内観を報告することが楽しくなってきた。最後の面接では、当の自分が不思議に思うぐらい、無我夢中に語っていたように思われる。

最後に、実習者が集まって、三木先生を中心に、その体験を語り合った。参加者のほとんどが内観を体験したのははじめてである。「母に対

しての調べが進むに連れて、母の気持ちが自分に乗り移ってくる感じがあって、ウキウキした。中学校に入って母が制服を買ってくれたとき、自分は恥ずかしいから早く帰りたかったけども、母は息子の制服姿を見て、心が弾むような気持ちだったのかなと、はじめて思った」と私が報告したときに、三木先生と参加者の表情がニコッと輝いたのである。わずか二時間、同じ場所で内観をしただけで、何かのつながりを確かに感じた瞬間であり、あらためて内観の大きな効力を痛感したのである。

その後、夕刻に、近くの市民プラザにて参加者による懇親会が開かれた。若輩者である私も特に遠慮することもない雰囲気を作っていただき、実行委員の皆さんには感謝している。長島正博先生からは「奈良でのワークショップのPRも含めて、何かスピーチをしてはどうですか」とご配慮いただき、僭越ながら、少し紹介をさせてもらった。有り難いことである。その後は西山知洋先生と貴重な時間を過ごし、宿にもどって、楽しみにしていた富山の温泉を思う存分満喫させてもらった。このようにして満点の初日が終了したのである。

翌十二日、二日目に入った。最初に内観の体験発表がプログラムされており、一人目が青少年自然の家に勤務する男性の体験談である。まず集中内観を体験し、「その後の日常の生活の色んな場面で内観的なものの考え方を無意識にしている自分に驚いていた」という。それから、ご自身の関連する職場の朝の時間を用いて、子供達に対し内観を実施して、短時間で顕著な効果が上げられたことが報告された。

二人目が主婦の女性の体験談である。ご家族が先に内観を体験されていて、その薦めで内観を受けることになったものの、「最初は全然気が乗らなかった。どうして自分が内観をしなくてはいけないのか」と沈んだ表情で、内観に対して強い抵抗があったという率直な気持ちが語られた。内観が嫌で仕方がなかったのに、長島正博先生に出会い、内観を進めて行くに連れて、ご自身が変わって行くのである。集中内観終了後に「最寄の駅まで歩いているときに出会う人一人ひとりに感謝の気持ちで一杯であった」という言葉を語っている彼女は輝いていた。聞いていて、この内観体験の際でも、「この人は内観でこれほど変わったのか」ということが、はっきりと伺える、そんな体験談であったと思った。

最後に、特別講演として、大正大学の村瀬嘉代子先生による「子ども時代とこころの糧（潜在可能性に気付く）」が開講された。冒頭、村瀬先生から「特に内観に限ってというお話ではなく、人と人とのコミュニケーションにおいて少しでも皆様のお役に立てることを伝えたい」という言葉があった。村瀬先生の語られる言葉は、謙虚で、包み込むような温かさで、聞いている人に心地よく響いてくるようであった。「人間にとって、子ども時代に経験したことは、どんなに些細なことでも、極めて重要です」「その人の中に眠る子ども時代の体験を、上手に表現することによって、その人は、こちらが驚くぐらい生き生きとした表情で語られることがあるのです」村瀬先生ご自身の事例を元に、具体的な説明が繰り返し行われる。随所に、援助者である先生自身の「本当にビックリ」「『エッ』『はあっ』と思った」というリアルタイムな驚きの表情と言葉により、聞いている我々が当事者として引き込まれていくような感覚に襲われたのである。相手とのコミュニケーションにおいて、「この人はこんな人だ」と簡単に判断するのではなく、温かく相手を包み込むような聞き方により、その人間の「その人らしさ」という宝が見えてくるのではないかという問いかけが、私の心の中に残っていたように感じた。

このようにして、富山での内観療法ワークショップは終了した。会場を出てみると、朝から降り続いていた雨がすっかり止んで、雲と雲の間から、秋の日差しが前方に広がる富山城の石垣を照らしていた。

内観療法のワークショップに参加したのははじめての経験である。石井光先生、村瀬嘉代子先生の講演に加えて、三木潤子先生の内観面接も体験し、そして、内観体験者の体験談もお聞きすることができた。石井先生の「心の宝探し」の通り、今回の北陸での体験は、自分の中に、たくさん眠っている宝を探すために必要な「宝探しのスコップ」をたくさんいただいたと思っている。有り難い気持ちで一杯である。

最後になりますが、長島正博、吉本博昭両先生をはじめ、ワークショップ実行委員の皆さん、ご苦労さまでした。心から感謝いたします。

【海外だより】

上海における内観療法講習会への参加報告

無錫市精神衛生中心　王　紅欣

二〇〇六年十二月四日～八日まで上海精神衛生中心において「中日森田療法と内観療法新進展講習班」が開催された。中国の山東省、福建省、四川省、河南省、青海省、甘粛省、江蘇省、上海市など二〇の区域から五〇人の医者が参加した。筆者も聴講生の一人として参加させていただいた。

日本の大和内観研修所の真栄城輝明先生、日本内観学会理事長の巽信夫先生、青山学院大学教授石井光先生、大阪心理相談センター榛木美恵子先生、榛木久実指導員、岡山県立岡山病院医療部長河本泰信先生など、六人の日本の先生たちは遠路はるばる上海までお越しになり、中国での内観普及のために講演をしてくださいました。

それと同時に、上海精神衛生中心の肖沢萍院長はじめ、王祖承教授、張海音副教授、唐文忠主任医師などの先生方も協力して、研究班での講義など、応援してくれたお陰で講習会は盛会のうちに幕を閉じました。講演を聴いた聴講生の医者たちはいろいろな質問を提出し、充実な研修だった。たとえば、榛木美恵子先生の講演に対しては、「浮気をした夫は妻の所に戻ったとき、内観をした妻はいったいどのような心理的な変化が起こり夫のことを受け入れたのか？」などの質問が出ました。それに対して、榛木美恵子先生は、「内観をした妻は夫に対して内観した結果、自分自身夫に対して大変迷惑をかけていたことに気付きました。さらに、夫からしてもらったことは、自分が夫にしてあげたことよりずいぶん多かったことに気づきました。そして、内観後は夫が浮気したことを赦すことが出来ました。夫が戻ってきたとき、喜んで迎え入れることが出来ました」と答えました。河本泰信先生の講義の後では、「男性として女性になりたい、こういう人に対して内観療法は効くのか？」という質問が出ました。それに対して河本泰信先生は、「単なる女性願望の男性に対しては、内観療法は効果がないと思ったほうがよい。しかし、お父さんの家庭内暴力によって幼い心が傷付けられた結果、男性になることを恐れている場合には、内観が効くと思う」と答えました。

今回の研修では、日本と中国の専門家たちは日本と中国の文化背景について、森田療法と内観療法の理論と治療機序について、興味深い講演をしてくれました。時間の制約のため、十分な質問ができなかったという人もいたと思いますが、それでも聴講した医者たちは内観療法について強い関心を持つようになりました。

筆者はかつて鳥取大学に四年間留学していたとき、川原隆造教授の下で内観療法の研究を行っていました。榛木美恵子先生は講演中に筆者のことを会場で紹介してくれました。そこで、筆者は日本で内観を体験したときの感想を話すことが出来ました。その場で、筆者は多くの聴講生の方々から内観についてたくさんの質問を受けることになりました。たとえば、「内観療法の技法は何ですか？」「面接者としていったいどのように指導しますか？」「内観療法の導入についてはどこか注意すべきですか？」「内観による心理的な変化はいったいなんでしょうか？」「内観療法は強迫性障害に効きますか？」「内観療法による効果をどうやって評価しますか？」など。

私のできる範囲で質問に答えました。今後、内観療法は間違いなく中国の精神療法の分野に普及することでしょう。

第1回中国内観療法学術交流大会のご案内

会議のテーマ「心に明かりを灯そう
—内観療法の魅力」
（要約　日本語訳）

大会の論文の募集

1 論文・論述、短いレポート・病例報告で、過去において未公開未発表のもの
2 原稿作成上の要件　引用文は300字を超えないこと、目的・方法・結果・結論と記述すること。また、3～4語のキーワードを列挙して下さい。
3 寄稿者の氏名、勤務先、連絡先住所を記入して下さい。
4 原稿作成上の要件ワード2000以上のバージョンのOSを使用すること・小4号の字体であること・原稿はE-mailまたは郵送で次のあて先まで

Eメール＝tsjsbyy@163.com
郵送先＝天水市精神病医院医務課　天水市秦州区表路17号　741000
5 不採用の場合、送られた原稿はお返しできません。ご自身で原稿を保存願います。

締め切り＝2007年8月10日
注意事項＝大会参加希望者は、2007年8月20日までに電話・電子メールでお申し込みください。論文提出の方は、必ず8月10日までに、論文原稿を郵送または電子メールでお送りください。（中国語又は英語でお書きください。なるべくE-mailで願います。）

連絡先電話番号＝0938－8365704
携帯番号＝13891388175 9
FAX＝0938－8365298
会議参加費用・大会参加費＝800人民元／人
食事・宿泊費＝中国国内の学者・代表者は、1泊100～120人民元
大会開催日＝2007年9月6日
大会関連の連絡および大会プログラム＝別紙参照
連絡先＝天水市精神病医院医務課（裴根祥、熊彬）
郵便番号＝741000
Eメール＝tsjsbyy@163.com
連絡先住所＝天水市精神病医院（天水市秦州精表路17号）
連絡先電話＝0938－8365704
FAX＝0938－8365298
中国心理衛生協会心理治療・カウンセリング専門委員会内観療法学グループ
天水市精神病医院
上海市精神衛生臨床センター

第十九回 内観療法ワークショップのご案内

このたび、この国のまほろば（奈良）にて、第十九回内観療法ワークショップを開催することになりましたので、ご案内方々内容の一部を以下に紹介させていただきます。

日程：二〇〇七年一〇月二七日（土）～二八日（日）
会場：奈良市男女共同参画センター　あすなら
　　奈良市三条本町八番一号　TEL 0742―34―1525
大会テーマ：混迷する現代に求められるもの

第一日目
【特別講演】
講師：土屋　守氏（精神科医・NHKテレビ出演）
演題：「衰退に突入した日本
　　―姿を変えた子供の『いじめられ死』を含めて」
【教育問題を考える】（パネルディスカッション）

第二日目
【混迷する現代をどう生きるか】（シンポジウム）
演者：人見一彦氏（精神医学）・木村慧心氏（ヨーガ療法）
　　藤原直達氏（キリスト教）・大山真弘氏（仏教）
【招待講演】
講師：安田　瑛胤氏（薬師寺管長）
演題：「まほろばを求めて」
事務局：大和内観研修所（準備委員長・真栄城輝明）
〒639―1133　奈良県大和郡山市高田口町9―2
TEL 0743―52―2579　E-mail naikan3@nifty.com

第三十一回日本内観学会沖縄大会のお知らせ

第三十一回日本内観学会大会長　長田　清

日程：平成二十年六月六日（金）七日（土）八日（日）
会場：沖縄コンベンションセンター（宜野湾市）
大会テーマ：「美ら心内観（チュラジムナイカン）」
事務局：沖縄内観研修所
TEL 098―948―3966　E-mail naikan@isis.ocn.ne.jp

沖縄の地において、第二十二回大会を開催したのが平成十一年五月でした。当時私は県立精和病院に勤めていて、精神科部長としてハードな精神科救急や急性期の入院治療を担当していました。ということは狭い専門性の中で仕事をしているので、社会一般のことやソフトな問題について疎いところ、対応しきれないところがありました。幸い当地には沖縄内観研修所があり、そこを中心として沖縄内観研究会が機能しておりましたので、メンバーの知恵を借りながら無事大会を終えることができました。

さて第二十二回大会の翌年私の父が亡くなり、それを契機に病院を辞め、平成十三年八月にクリニックを開業いたしました。それまでと違い、一般社会の普通の生活の中で生じる葛藤、悩みを扱い、その援助という仕事内容に変わりました。そういうスタンスの変化が今回は役に立つと思います。研修所や研究会のメンバーのバックアップが変わらずあることも心強く思っています。

今大会のテーマは、私の母のアイデアで「美ら心（チュラジム）」を採用。内観でみんな美しい心を持とうよ、という意味です。

皆様には沖縄の美しい自然と素晴らしい施設（美ら海水族館など）も堪能して頂き、われわれも沖縄県民の本来持つ素朴さと純真さを取り戻してホスピタリティを発揮するようにいたします。沖縄でお待ちしていますので、どうぞお越し下さい。

広報編集委員
塚崎　稔（三和中央病院）
木村秀子（米子内観研修所）
本山陽一（白金台内観研修所）

原稿の送り先
〒108-0071　東京都港区白金台3-13-18　白金台内観研修所
TEL　03-5447-2705
FAX　03-5447-2706
E-mail　zan25224@nifty.com